

感研プロジェクト 3.11

プロジェクト主催フォーラムについて(報告)

感研プロジェクト 3.11 プロジェクト主催フォーラム

「集中復興期間」後の地域の復興課題を考える—原発事故後の福島県内での取組を通じて—

■概要

日 時：平成 30 年 3 月 4 日(日) 14:00~16:45

場 所：東北福祉大学感性福祉研究所 大会議室

主 催：東北福祉大学(感性福祉研究所研究プロジェクト 3.11)

■プログラム

14:00	開会
14:05	開会の挨拶 阿部 四郎特任教授(東北福祉大学、プロジェクト研究代表者)
14:10	第1部：福島の現場から コーディネーター 江尻行男教授(東北福祉大学、プロジェクト総括班) ・猪狩 隆氏 (富岡町社会福祉協議会事務局長兼介護保険事業所長兼総合福祉センター長) ・吉田 喜美江氏、鈴木 美保子氏、加井 千佳子氏 (浪江町役場健康保険課健康係保健師)
15:10	休憩
15:20	第2部：フロアディスカッション コーディネーター 阿部 裕二教授(東北福祉大学、プロジェクト総括班)
16:30	ディスカッション総評
16:35	閉会の挨拶 阿部 一彦教授(東北福祉大学、プロジェクト総括班)
16:45	閉会

■フォーラムの様子

平成 30 年 3 月 4 日に東北福祉大学感性福祉研究所において、本研究プロジェクト主催のフォーラムを開催した。フォーラムでは、テーマを『集中復興期間』後の地域の復興課題を考える―原発事故後の福島県内での取組を通じて―とし、福島県の富岡町、浪江町において、発災後から現場の最前線にて被災者支援を実施してきた 4 名の報告者からテーマに沿って報告を頂き、本プロジェクトの参加研究者とのディスカッションを行った。なお、本フォーラムは一般公開で開催されたことから一般の参加もあり、報告者も含め 26 人の参加であった。



◆プロジェクト代表阿部四郎先生の開会の挨拶 ◆江尻行男先生のコーディネートでの第一部報告

第 1 部「福島の現場から」として、富岡町社会福祉協議会の猪狩隆氏より福島県富岡町の発災から現在までの状況とこれまで採られてきた各種被災者支援施策、社会福祉協議会としての取組と現在の課題について発言を頂いた。続いて、浪江町役場健康保険課の保健師である、吉田喜美江氏、鈴木美保子氏、加井千佳子氏の 3 名より浪江町の発災から現在までの状況、保健師の支援活動とそこでの住民の声、現在の課題についての報告がなされた。



◆富岡町社会福祉協議会、猪狩氏の報告 ◆浪江町保健師、吉田氏、鈴木氏、加井氏報告

第 2 部では、第 1 部の報告を受ける形で、参加者全体でのフロアディスカッションが行われた。そこでは、第 1 部での発言内容に対して、浪江町にて、震災前より健康づくり運動支援を実施している鈴木玲子先生からの浪江町保健師報告への補足発言がなされた。また、浪江町の保健師 3 名と連携している福島県立医科大学の古戸先生の参加もあり、震災直後の福島県の状況に関する発言を頂いた。



◆鈴木玲子先生からの補足発言



◆福島県立医科大学 古戸先生からの発言



◆阿部四郎先生からの質疑コメント



◆阿部一彦先生による閉会の挨拶

第2部の質疑応答では、福島県内の状況をめぐりフロアとの質疑応答がなされた。そこでは、生活習慣病の状況、震災関連死の状況、サロン活動の状況など、各報告者の実践現場の状況についての質問がなされた。質疑応答では、阿部四郎先生より質疑を総括する形で、放射能災害がもたらした被災地域への不条理についての意見が出された。2部のディスカッションの総評としてコーディネーターの阿部裕二先生より2つのキーワード—孤立化、居場所—が避難と帰還をめぐって複雑に関係しあっていると4名の報告とディスカッションの内容を踏まえてのまとめがなされた。最後にプロジェクト総括班の阿部一彦先生より閉会の挨拶によってフォーラムが終了した。

本プロジェクトとしては、研究計画において“地域の現場的視点に立ち、かつ事態の進行に密着する追跡型のアプローチを採用”すると謳っていることから今後も継続して現場の実務家にお越し頂き研究者との対話の機会を持ちたいと考えている。